

2016年
(平成28年)
2月発行

第11号

宝同協だより

め ぼ 芽 生 え



編集発行：宝塚市人権・同和教育協議会

〒665-8665 宝塚市東洋町1番1号(宝塚市教育委員会事務局 学校教育課内) TEL:0797-77-2040/FAX:0797-71-1891

2015(平成27)年度 人権・同和教育問題啓発作品入賞者のお知らせ

【ポスターの部】

○ 最優秀賞 (3点)



龍野 瑠菜 (仁川小 3年)



梅村 まほろ (山手台小 6年)



小塩 麻友 (長尾中 2年)

○ 優秀賞 (6点)

北村 美緒 (小浜小 3年)・末岡 心羽 (すみれガ丘小 2年)・山本 千晴 (宝塚小 4年)
高橋 璃々子 (安倉北小 6年)・北崎 葵 (長尾中 3年)・萩原 麻由 (高司中 3年)

【標語の部】

○ 最優秀賞 (4点)

橋本 明香里 (末広小 3年)
南 慎吾 (雲雀丘学園小 5年)
久保 文弥 (宝塚中 1年)
芝 智恵子 (市民)

『ふざけても いやがることは やりません』
『メールより 君の目を見て 話そうよ』
『考えて 「いじり」が「いじめ」に なる瞬間』
『知らぬ間に ラインでいじめる 仲間入り』

○ 優秀賞 (8点)

久木田 僚涼 (良元小 1年)・山下 悠登 (長尾小 3年)・堀江 真帆 (宝塚小 4年)
和田 六果 (長尾台小 5年)・西本 和葉 (西谷中 1年)・坂本 陽菜 (高司中 2年)
平井 千賀 (市民)・山上 憲子 (市民)

【作文の部】

○ 最優秀賞 (4点)

有馬 康泰 (宝塚第一小 1年) 『フワフワなこころ』
和田 百恵 (小浜小 6年) 『教育とは何かを考える』
森澤 一充 (宝塚第一中 3年) 『祖父の話を聞いて』
高司 暖子 (雲雀丘学園高 2年) 『ハンカチのまんなか』

○ 優秀賞 (9点)

後北 陽南子 (西谷小 3年)・今村 志帆 (光明小 3年)・中川 陸聡 (末広小 2年)
中 琉星 (売布小 6年)・中野 志歩 (丸橋小 4年)・森 祐美子 (宝塚第一中 2年)
平川 葵 (御殿山中 1年)・林 晃希 (雲雀丘学園高 1年)・澤田 和奏 (雲雀丘学園高 2年)

【写真の部】

○ 優秀賞 (1点)

綿村 蒼 (宝梅中 3年) 『ママ、あのね…』



※ 最優秀賞・優秀賞入賞者のみを掲載しています。

※ 最優秀賞・優秀賞・佳作入賞者は宝塚市のホームページでもご覧いただけます。

<http://www.city.takarazuka.hyogo.jp> 【ページID:1001134】

ホーム > 教育・子ども・人権 > 人権・平和 > 人権 > 宝塚市人権・同和教育問題啓発入賞作品

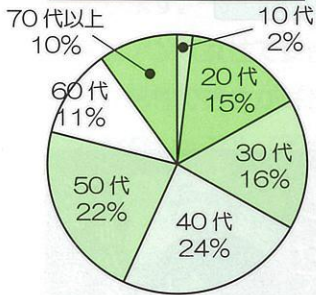
第 5 回 宝同協研究大会「人権交流学びのつどい」

1月23日(土)に開催した研究大会には、過去最多の277名の参加がありました。あんだんて♥りんがーずの皆さんによる美しい音色のハンドベルの演奏にはじまり、7つの分科会では、報告者から貴重な報告を聞きました。その後、参加者による熱心な話し合いと交流がおこなわれ、多くの成果を得ることができました。

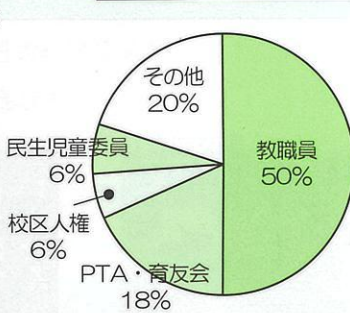
参加者のアンケート結果と感想を紹介します。【アンケート回答者：206名】



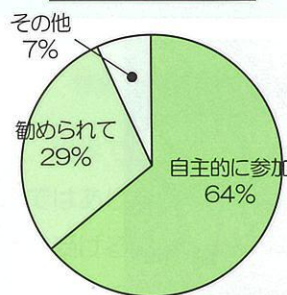
参加者の年齢構成は？



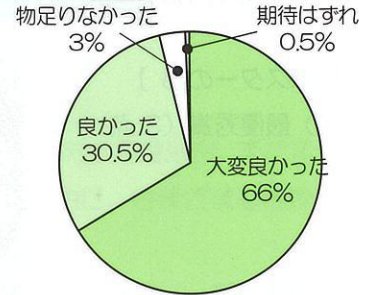
参加者の所属構成は？



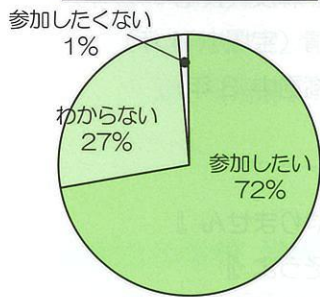
参加については？



分科会の内容は？



来年も参加しますか？



◆ 参加者の感想 (アンケートから抜粋) ◆

- あんだんて♥りんがーずの皆さんの「花は咲く」は思わず涙ぐむくらいきれいでした。(40歳代)
- 情報の分科会に参加しましたが、中学生の生徒さんのしっかりした発表や発言に驚きました。(40歳代)
- 当事者の話を聞き、差別につながること、偏見を持つてはいけないことを改めて考えさせられました。(70歳代)
- 宝同協の交流会はいろいろな分野の人や中高生たちとも話ができて素晴らしい交流会です。来年もまた参加します。(50歳代)
- 毎年、参加者が増えていきますね。司会の方が工夫されていたり、報告者の生の声が聞けるのがすごいです。(30歳代)

差別の根絶に向けた取り組みや人権教育の実践例を報告し合う「第67回全国人権・同和教育研究大会」が昨年の11月21日(土)～22日(日)に長野県では初めて開催されました。全国から約8千人が集い、21会場で人権教育活動などを報告する分科会が行われました。次回は、熊本県熊本市で11月26日(土)～27日(日)に行われます。

全国人権・同和教育研究大会



11/21 ホワイトリングでの全体会の様子

連載 夢と希望はどっち？

⑩ 子どもの貧困

最近、「子どもの貧困」がよく取りざたされています。日本の子どもの貧困率が、16%を超えたとか、世界の平均を上回っているとか、クラスには平均5～6人いるとか……。

子どもの貧困率とは、世帯収入から国民一人ひとりの所得を試算して順番に並べたとき、真ん中の人の所得の半分に届かない18歳未満の子どもの割合をいいます。

この単なる統計上の数値でもって、日本の子どもたちに「貧困」のレッテル貼りをしていくようで、嫌な思いにさせられます。さらに、貧困家庭の子どもは、家族旅行に連れて行ってもらえないとか、家族で外食が少ないとか、塾や習い事に行けないとか、学力や体力が低いとか、健康的でない生活をしているとか……子どもたちをそんな言葉やイメージで追い込まないでほしいものです。

子どもはたとえ貧しくても心は豊かです。たとえ学力が低いと言われても、一所懸命勉強しているのです。体力が低くても元気に遊べるのです。日本だけではなく世界の子どもたちみんなそうです。

こんな子どもも頑張り、明るさ、素直さ。それらを大事にしている子どもたちに「貧困」なんて、貧困でない「おとな」がさげすみに遣う言葉と思うのです。

小学6年生の子どもがこんな詩を書いています。

学校の帰りに一円玉を落とした
音はしなかった
友だちが、今、何か落ちたんとちがうかと言った
うん、一円玉落とした、一円ぐらい、いいと言ったら
一円だからこそさがすんだ、と言ってくれた
こんな友をもってしあわせだ

【和久】

全国中学生人権作文コンテスト 入賞作品の紹介

宝塚市内の中学校では、毎年さまざまな人権課題をテーマにした「人権作文」を書いています。今年度は市内で4,801点もの作品が書かれました。まず、校内で選考された作品は、市内での選考を経て6作品を伊丹地区大会に出品します。その中から最優秀賞に選ばれた5作品は、兵庫県大会へと進み、さらにそこでも最優秀賞に選ばれた6作品が全国大会へと進んでいきます。今回は、全国大会で「法務省人権擁護局長賞」を受賞された、宝塚市立宝梅中学校の今井ふみのさんの作品を紹介します。

【法務省人権擁護局長賞】



バリアが見える目

宝塚市立宝梅中学校 三年

今井 ふみの

私の家から学校までの道のりはずっと坂道だ。段々急になって、一番最後の所は地獄坂と呼ばれている位急だ。入学したての頃は山登りをしているみたいで結構しんどかったが毎日登っているとやはり慣れてくるものだ。地獄坂を歩いていると始めの方の道なんて坂であることすら忘れてくる。そして、それを忘れてきた頃、私の登校時間に出動している人の顔ぶれも覚えてきていた。いつも走っているスーツの人、黒いリュックを背負っている人、ベビーカーと自転車を両方押しているお父さん、そして車いすの男性。私がよく見る車いすの人は電動が多いがこの男性は手で、しかも直接主輪を回しているため、白いテープングが巻いてある手は真っ黒だった。そして、中学校生活にもすっかり慣れた頃、私はその方が気になり始めていた。誰にも助けを求めず、荒い息づかいのまま主輪を回し進み続けている。誰が見てもしんどそうだった。でも私にはあいさつもした事なく、目が合った事もない人に声を掛ける事はできなかった。そして、通学路でその方を追い越すたびに、その一瞬がなぜか少しだけでもどかしい気持ちになった。

そんなある日、いつも一緒に登校している同じ部活の友達に「ごめん！先行ってー」と

言われ、一人で歩いてた。すると、遠くに車いすが見えた。それはやはりあの方で、横断歩道を渡り切った所で止まっていた。今までに止まっている所を見た事がなかったのでも少し驚いたが、私は歩き続けた。その男性はどうも休んでいるようだった。他の人はほとんど男性を追い越す。私と男性の距離が近づくとつれて心臓のドキドキが強く速くなっていくのが分かった。そして私もいつも通り追い越そうとした時、勝手に体がふり返った。

「押しても良いですか？私、押せます…。」
車いす大丈夫ですか？壊れてるんですか？」
と言った。よく分からないが「押しましようか？」と言ったら、上から目線だと思われそうなのが怖かったのと緊張のせい、少し変な声の掛け方をしてしまった。男性は驚いたようだった。私も自分自身に驚いていた。しかし、男性は意外にもにっこり笑って、

「ありがとう。でも、僕、重いよお。大丈夫かあ？お嬢ちゃん。」

と云ってくれた。その言葉に安心した私は「全然大丈夫です！」と答えた。そして、ハンドルを強く握った。男性はブレーキを掛けていたしパーを戻した。その瞬間、予想以上の重さが私の腕に掛かってきた。よく考えれば今まで成人男性の車いすは押した事がなかった。親戚が車いすだったり、福祉センターによく通っていた事もあり、車いすにはある程度慣れているつもりだったが、初めての感覚に動揺していた。そして思った。(あつ、ここ、坂道だ)と。私にとって何でも無いこの道がその瞬間、急に長い長い坂になった。不安になったが、とにかく進もうと思いい、足に力を入れた。そして、全然大丈夫です！なんて言った事を後悔した。まったく進まなかったのだ。自分で押すと言って重くても大丈夫とも云っておいて、押せなかった。私は焦り

や不安などが混同して固まってしまった。でも男性は気にする様子もなく手で主輪を回し続けた。私が見ても元々力を加えていたのもあり、すーっと進んだ。なんだかとてもうれしかった。追い越すあの一瞬×二年分”のもどかしさがぱっと消えた。そして、一回進むと私一人の力でも押せるようになり次の信号までスムーズに進めた。本当は途中で疲れていたが、止まるともう一度出発ができない事は目に見えていたので押す体勢を変えながら足を前に出し続けた。そして信号待ちの時、男性は気さくに話し掛けて下さった。部活や高校の事などアドバイスもしてもらった。信号を無事に渡り切った時、「他に質問ないか？お礼に、僕が分かる事何でも教えたんで！」と言われた。本当に良い人で、私もこんな気の利く人になりたいと思った。そして、私と男性の別かれ道が近づいてきた時、突然「ガッキ」とキャスターが何かに引っ掛かってフットレストがフェンスにぶつかった。なんとかキヤスタップはできたが、びっくりした。よく見ればそこは一週間前からタイヤが数枚剥がれていた所だ。私の不注意のせいで転倒していたかもしれない。そう思うととても恐い。それでも男性は「ありがとう」と笑顔で言うて駅の方へ向かって行った。それは今までで一番心に響いた「ありがとう」だった。

私はこの後、日常生活の景色が変わった。今までもバリアフリーについて考える機会があったが、今回の事で日常生活の場を不由な方々の目線で見られるようになった。みんなが少しずつバリアを取り除けたなら、どんなに暮らしやすくなるだろうか。年を重ねるにつれて私に今できることが増えていく。小さなバリアに気づけるようになったら、今度はそれをフリーにしていけるよう、私にできることを探したい。

【原文のまま】

性的マイノリティ(セクシュアルマイノリティ)について



性的マイノリティってなに？

自分と同じ性の人に魅力を感じる人や、「生まれ持った体の性」と「心で感じている性」が一致しないと感じる人などのことです。

性の多様性を表す言葉の頭文字をとって「LGBT」と呼ばれることがあります。

L：レズビアン（女性で女性が好きな人）

G：ゲイ（男性で男性が好きな人）

B：バイセクシュアル（同性も異性も好きになる人）

T：トランス・ジェンダー（体と心の性に違和感がある人）

～ 私たちにできること ～

知らないことが偏見を生みます。

すべての人が尊重され、自分らしく生きるために、性的マイノリティについて、正しく理解することが必要です。

私の周りにはいないし…

日本では人口の約 7.6%、すなわち 13 人に 1 人と言われています。「周りにいない」のではなく、「いじめられるかもしれない」などの不安から「周りに言えない」のです。

性的マイノリティの悩み

日本では性的マイノリティに対する理解が、まだまだ十分ではありません。「違い」を理由に、さまざまな差別や偏見を受けることも少なくありません。

家族にも理解してもらえないこともあり、誰にも相談できず、悩みを一人で抱え込み、孤立しがちです。

宝塚市では、性の多様性を理解し、誰もがありのまま安心して自分らしく過ごせる、そんな「生きやすい社会」をめざして取り組みを進めています。

【 池澤 】

長尾台小学校 学校保健委員会より

2015（平成 27）年 11 月 19 日（木）、「セクシュアルマイノリティって、なに？」をテーマに、当事者お二人をお迎えし講演していただきました。人間の性のあり方は「カラダの性」「ココロの性」「スキになる性」の 3 つの要素があるが、日本では性別は男性か女性で分けられてしまい、異性愛が当たり前とされる中、生きづらさを抱えながら、ありのままの自分を探してきたことについて話していただきました。次に、小・中・高・大学生と成長する過程で、本当のことを言えないストレスとのたたかきがあり、「このままじゃ、アカン！」と思いカミングアウトしたエピソードや周囲の何気ない否定的な言葉が心の傷になっていることについて語っていただきました。最後に、セクシュアルマイノリティを取り巻く問題は教育現場において「子どもの命の問題」として、今すぐ本人や保護者の支援が必要であるという強いメッセージを伝えていただきました。 【 梅田 】



< 参加者の感想 > ※一部抜粋

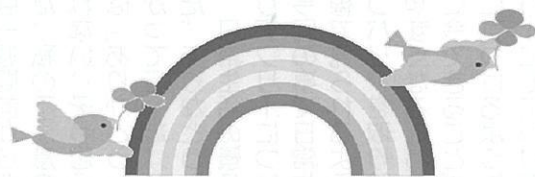
- ・教師という立場で日々子どもたちと向き合っている以上、もう少し深く、慎重に考えないといけないと思いました。少数派の子どもたちを傷つけていないか、自分の行動を振り返り、これからも考えていきたいと思いました。
- ・こんなにも性の多様性があるのだと、改めて知って驚くとともに、傷ついている方々がいるかもしれないこと、自分も知らず知らずの内に相手を傷つけていたかもしれないことに思い至りました。

「人権交流学びのつどい」は今回で第 5 回の開催を迎えることができました。これからも参加された皆さんと一緒に、さまざまな「人権」について考えていきます。

宝塚市では「性的マイノリティに寄り添うまちづくり」をめざした取り組みを進めています。それには私たちの正しい理解が必要です。

これからも宝同協は、数ある人権問題について考え、「人権文化が薫るまち」をめざして取り組んでいきます。

◇ 編集後記 ◇



宝同協だより「芽生え」編集委員

津国 千恵子（編集委員長）・原田 千恵子・梅田 美佐子
田口 祐子・谷岡 慈徳・吉田 亜樹・池澤 径子
谷添 美也子・大塚 亜紀・和久 有彦・山本 悠